



## 司馬遷史記 I ① (司馬遷の独自性)

11 月①のごあいさつ

山内公認会計士事務所

2023 年 11 月 1 日(水)

司馬遷は歴史の著述を畢生の事業と考えていた。

彼は父の司馬談(漢の史官の長である太史令)の跡を継いだ。司馬談は途絶えていた歴史記録を再興して、明主賢君、忠臣義士の事跡を明らかにしようと願ったが、志を果さぬまま世を去った。司馬遷は父の遺志を受け継いで、古今にわたる通史を著わすべき宿命を負わされたのである。

幼児期すでに古文書を読み、20 歳前後には漢のほとんど全域を施行するなど、父の徹底した教育方針のもと歴史家としての素養を積み重ねた。

漢の李陵は当代屈指の名将であった。

歩兵 5 千を率いて匈奴 10 万の騎兵を向こうにまわし、1 万を越える損害を与えたあげく、武運つたなく匈奴の捕虜となった。

武帝はその結果に激怒し、李陵の処分をめぐる朝儀が開かれた。群臣は武帝の意をはばかり李陵の非を鳴らす中、司馬遷は李陵の功績を称揚し、李陵を批判する群臣を弾劾した。しかし、結果は他を誹謗したとのかどで、獄にくだされる身となった。

2 年後、大赦令によって出獄した司馬遷は武帝の側近として勤めるかたわら史記の著述を行った。伝承による中国の古代史は、神話的な五帝の時代を経て夏・殷・周の三王朝から始まるが、学者たちは、周以後を歴史時代とみなし、殷以前は伝説時代として王朝の存在を疑問視していた。

司馬遷は殷の暴君紂に至る 43 代を克明に記した。21 世紀に入って江南省安陽で殷都の遺跡が発掘され、そこから発見されたおびただしい甲骨文の解読によって司馬遷の記した系譜がほとんど一致することが実証された。

司馬遷は歴史を通して人間を描こうとした。

歴史を動かしたものの、本紀は王朝の歴史であり、「世家」は諸侯の家の記録であり、「列伝」は英雄豪傑から市井の庶民に至る個人の伝記である。

本記、世家、列伝の三者は、太陽を取り巻く惑星、衛星のように互いに密接な関連を保ちながら、立体的な歴史の世界を形作る。漢の高祖と天下の派遣を争った一世の英傑項羽は本紀に位置し、漢朝二代目の皇帝は本記にはなく、すべての号令を出していた母后たる呂公のために本紀をたて、形式にとらわれず人間を直視する。

この現実主義の精神は「史記」を一貫する基調である。法を乱すやくざや、利益のみを事とする商人を聖賢と同様に扱う態度は、後世の儒者から非難もあびたが、そこにこそ司馬遷の「史記」があると見える。

(参考：司馬遷史記 I、徳間書店)